

枯れていく。でも好きだから。

「花言葉は知らない」

第3稿 251216

---

【人物一覧表】

石田花(いしだはな) 女性・29歳

佐藤秋人(さとうあきと) 男性・24歳

坂井誠(さかいまこと) 男性・43歳

経理年配の女性

1

## 秋人の部屋・明け方

カーテンのほんの小さい隙間から、まだ青い朝日が覗いている。

石田花(29)は、朝の支度を終えて、バスルームから出てくる。

鍵を手にとった音で、ベッドで寝ていた秋人(24)が起きてくる。

秋人「(眠そうに)花さん」

花「おはよ」

秋人「一回帰るの？」

花「うん、またあとで」

秋人「いつてらっしゃい」

秋人は玄関まで花を見送り、ハグをする。

一緒に過ごせた時間に満たされている秋人。

花「秋ちゃんも、いつてらっしゃい」

一方、笑顔だが、どこか遠くを見ているような花。

2	並木道
3	会社・オフィス

明け方の街をひとり歩く花。

外回りから戻ってくる花。

自分のデスクに荷物を置く。

隣のデスクは秋人で、こっそり目線が合って、お互

い微笑む。

書類だけ持って、上司のデスクへ。

花 「坂井さん、今大丈夫ですか？」

上司・坂井誠（43）に声をかける。

坂井 「ん、いいよー、どうした？」

花 「\*\*（社名）さん、契約更新しつつ、新規のプランで、

こういうことできないかって、ご提案があつて……」

坂井「なるほどね」

花「売り上げは上がりますけど……」

坂井「\*\*\*さんだったら、現状の契約内でも調整してあげたいよね」

花「そうなんです、大口なので……」

坂井「うん、いいよ。契約内の方針で上と話すわ」

花「ありがとうございます！」

坂井「さすがです、花さん」

花「いえ、坂井さんなら、そう言ってくれると思ってました」  
にこやかなふたり。呼吸が合っている感覚。

デスクに戻る花。ちよつとだけにやけた顔が戻らなくて。

視線は、坂井を見ている。

秋人「花さん、この資料なんですけど」

花「ん？」

花は秋人のパソコンを覗き込む。

二人は距離が近くなって。

花 「あ、これはね」

秋人「……」

説明している花の横顔を、秋人は至近距離で見つめていて。

花 「佐藤くん？」

秋人はさらに、ぐっと距離を詰めて。

秋人「(こそっと) 近いなあと思って」

花 「(こそっと) ころら」

人差し指を口の前で立てて、小さく「しー」と言う。

4

会社・オフィス

デスクワークしている花。

たばこから戻って来た坂井、秋人。

坂井「花。佐藤くんが、花さんすごいって言ってたよ」

秋人「ちよ、坂井さんチクらないでくださいよ！」

花 「え？佐藤くんが？」

5

駅前・夜

坂井「(真似して)花さんすごいっす、って」

花「(笑って)坂井さんはそうやってプレッシャーかける」

坂井「そんなんじゃないよ」

花「坂井さんは思ってるじゃないもん」

坂井「思ってるって」

花「ふーん、そういうことにしましょう」

花、頬を膨らませてみせる。

坂井、自分のデスクに戻りながら、

坂井「もう、すぐ怒る。ごめんって」

花「怒ってませーん」

花、デスクワークに戻る。

ふたりのやりとりを見ていたが、秋人もデスクに着く。

スマホを触っている花。

6

秋人の部屋・夜

少し離れたところから、秋人が手を振って走って  
くる。

秋人「花さん！」

人目を気にせず、抱きしめる。

花「秋ちゃん、駅だから！」

秋人「会いたかった」

花「会社で会ったよ」

秋人「会社じゃ話せないもん」

花「秋ちゃんが報告不足なの」

秋人「そういうことじゃなくて！」

花「(遮って)はい、手」

花は手を差し出す。嬉しそうに秋人は恋人繋ぎする。

嬉しそうに、駅を離れる二人の背中。

手はぎゅっと固く繋がれている。

仲良くごはんを食べている二人。

お酒も入っていて。

秋人「坂井さんが、花さんの頑張り方は見習うな！って言ってみました」

花「（笑って）私がすぐ無理しちゃうの知ってるからな、あの人」

秋人「……仲良いですよね」

花「ん？仲良く見える？」

秋人「普通の、上司と部下の距離感じゃないと思います」

花「んー、長いから、としか言えない。私が坂井さんに甘えてんの」

秋人「坂井さんと同じこと言ってます」

花「同じこと？」

秋人「俺が花に甘えてるだけだーって」

花「（吹き出して）言いそう！」

秋人「ほら！」

花「でも私が甘えてるだけだから！」

7

秋人の部屋・深夜

秋人「俺にも甘えてくださいよ！」

花「秋ちゃんへの、甘え方は、こう、違うじゃん」

秋人「甘えてるんですか？」

花「世界」

秋人「(笑って)世界？」

花「うん？宇宙？」

秋人「宇宙？」

花「んー、人類？」

秋人「狭くなってる！」

花「えー！狭くなったかなー？」

なんて、爆笑している。

テレビの明かりだけついている部屋。

ふたりは濃厚にキスして求め合う。

吐息だけが、部屋に響いている。

キスの合間、ふたりは無言で見つめ合って。

秋人「花さん」

花「ん？」

秋人「すきです」

花「ん」

秋人「大好きです」

花「可愛い」

秋人「花さんは？」

花は黙って、キスだけ返して、頭を撫でる。

花「……ん？」

秋人「ずる」

花「もっと、好きって言ってよ」

秋人「……ずる」

花「ん、可愛い」

秋人「ずる！」

秋人はヒートアップして、吐息は深くなっていく。

8

秋人の部屋・深夜

ベッドで眠る秋人。横で眠れない花。

花 「……」

秋人の寝顔を見つめている。

こっそりベッドから抜け出す。

坂井とのトーク画面を開く。

内容は簡素な仕事のやりとりだけ。

理由もなく、遡って、読んで、それをただ眺めている。

秋人は実はうつすら目を開けて、それを見ている。

9

オフィス街

歩いている花。

スマホの通知が鳴って、立ち止まる。

秋人からの通知『今日うち来る?』。

## 会社・オフィス

少し考えて、ポケットにスマホをしまおうとすると、  
また通知。

坂井から。『来週の会食の店どうなってたっけ？』。  
道の端に寄って、返信。

秋人からのメッセージには、未読スルー。

スマホをポケットにしまい、再び速足で歩き出す。

デスクワークしている花。

秋人が外回りから戻って来て。

秋人「花さん、返事……」

花「ん？あ、ごめん。忘れてた」

秋人「もー」

花は周囲が気になる。特に坂井に見られてないか。

花「（誤魔化すように）資料のチェックね、ごめんごめん！」

秋人に愛想笑いを返す。

11

ビルの前

拗ねたように、秋人は見つめてくる。  
笑って返すが、周囲を気にして、小さく「くら」と  
言う。

営業後、ビルの前で、花と坂井。

坂井「おつかれっす。今日も、いいプレゼンでした」

花「坂井さんに比べたら、全然です」

坂井「このまま直帰？」

花「いえ、帰社して、部長に報告します。」

坂井「いいよ、直帰しなよ。俺電話しとくし」

花「直したい資料もあるので。大丈夫です」

坂井「……じゃあ俺も一緒に戻る」

花「え、坂井さんこれから会食じゃ……」

坂井「ん、会社からのが近い」

花「じゃあ会社戻らず、どっかで休憩してたらいいのに」

12

会社・オフィス

坂井「ん？いいじゃん、一緒戻ろうよ」

有無を言わず、坂井は先導して歩いて行く。  
困ったように、呆れたように、ついていく花。

帰社してくる二人。

坂井「資料、直すんだっけ？」

花「はい、今日の打ち合わせを受けて、  
具体的にしてから渡  
したいと思ってます」

坂井「そっか、キリいいとこで帰りなね」

花「はい、わかってます」

坂井「俺、すぐ出るから、なんかあつたら連絡ちょうだい」

花「え、近くで会食ですよね？」

坂井「……会食の場所、勘違いしてたわ」

花「もう。だから帰社しないで……」

坂井「ごめんって。部長には伝えといて」

会社・表

花 「はい。会食いってらっしゃいませ」

坂井 「うん、また明日」

花 「お疲れ様でした、お気をつけて」

秋人は二人の会話を盗み聞いていて。

花は秋人を一瞥もせずに荷物を置いて部長の元へ。

デスクに戻っても、すぐデスクワークを始める。

秋人との会話は無い。

ガードレールに腰掛けている秋人。

そわそわ、スマホを見たり、入り口を見たりしている。

中から花が出てくる。

秋人 「花さん！」

花 「佐藤くん？」

秋人 「偶然ですね！今帰りですか？」

15	<p>オフィス街</p> <p>既読はつけない。</p> <p>ツセージ通知。</p> <p>『何時になってもいいから、電話ほしいです』とメ</p> <p>着信には出ず、仕事を続ける。</p> <p>スマホが鳴る。秋人から着信。</p> <p>灰皿には火の点いたたばこ。</p>	14	<p>花の部屋・ベランダ・夜</p> <p>秋人は、いつもの二人の距離感で。</p> <p>その距離感に気付いて、花は少し距離を置く。</p> <p>二人、同じ方向に歩き始める。</p> <p>花 「そっか。じゃあ、駅まで、一緒行こうか」</p> <p>秋人 「いや……忘れ物して、さっき、出て来たところですよ」</p> <p>花 「うん？佐藤くん、とっくに出なかつたっけ？」</p>
----	---	----	--

16

会社・喫煙所

通勤中の花。

ふと、スマホを出して、秋人に返信『ごめん、寝てた』。

坂井が入ってきて、たばこに火を点ける。

すかさず花が入ってきて。

花 「坂井さん」

坂井 「花？」

花 「ちよつとだけ、ご相談いいですか？たばこ1本分だけ」

坂井 「いいよ。煙吸いすぎないようにね」

花 「はい！佐藤くんなんですけど」

坂井 「うん」

花 「報連相がすごく苦手で……」

坂井 「あー」

花 「坂井さんなら、こういうときどう指導しますか？」

坂井「ん？」

坂井はたばこを吸いながら、考えている。

花はそれをじっと眺めていて。

坂井「まあさ、難しいよね」

花「坂井さんはどうしてます？」

坂井「俺？うーん、指導とか苦手なんだよなあ」

花「私が新卒のときどうしましたっけ？」

坂井「花、優秀だったしなあ」

花「またそれ」

坂井「大丈夫だって、信じてやりなよ」

坂井はたばこの火を消して、出ていく。

花「もう」

17

会社・オフィス

坂井のデスク、前には秋人が立っていて。

坂井「\*\*ってアポどうなってたっけ？」

秋人の部屋

秋人「\*\*……」

坂井「ん、佐藤くんをお願いしてたと思うけど？」

花がオフィスに入ってきて、それを見つめる。

秋人「まあさ、漏れは誰にでもあるから。でもそれ花に皺寄せいくからさ」

秋人「すみません……」

坂井「佐藤くん、元気でいい子だねって各社から好評だし、頑張ってるからさ」

遠目で見ている花。

しよんぼりしている秋人。

くつろいでいるふたり。

秋人「坂井さんに怒られちゃった」

花「怒ってないよ。坂井さんは上司だから、注意するのも仕事なの」

秋人「でも……目が怒ってた」

花「考えすぎだよ」

秋人「花さんのことになると、坂井さんはちょっと人間になる」

花「人間？」

秋人「仕事できすぎるAIみたいじゃないですか？」

花「(笑って) そんなことないよ、ああ見えて忘れっぽいし、生活能力低いし……」

坂井の欠点(人間っぽいところ)を、指折り数える花。

それを見ていて、秋人、不意打ちでキスをする。

ふたり、見つめ合って。

花「やきもち？」

秋人「……キスしていいか聞けばよかった」

花「たぶん、女の人に、あんまり聞かない方がいいと思う」

秋人「なんで？」

花「ん？じゃあ、キスしていい？って聞くね？」

秋人「うん」

19

カフェ・昼

花 「秋ちゃん、キスしてもいい？」

秋人 「いいよ」

花、秋人にキスする。

秋人 「？」

花 「じゃあ、違うパターンするね？」

秋人 「うん」

花 「秋ちゃん、キスしたい」

秋人から花にキスする。

閃いたような顔で。

花、ニヤニヤしていて。

秋人 「ねえ！花さんずるい！」

花 「ん？？」

秋人 「花さん！花さん！俺キスしたい！ね！」

花から秋人にキスする。段々濃厚になっていって。

私服の花、秋人。お茶している。

秋人「花さん」

花「ん？」

秋人「実は、今日はプレゼントがあります！」

花「えっ？誕生日じゃないよ？」

秋人「なんか、どうしてもプレゼントを渡したくなって。じゃんっ」

紙袋を手渡す。中身は小さなブーケ。

花「お花だ……えー、嬉しい！」

秋人「ほんと？よかったあ……」

ブーケを眺めている花。

花「せっかくだからさ、秋ちゃんちに飾ろうよ」

秋人「え？俺んち？」

花「ふたりで会うときは、いっつも秋ちゃんちだし。ふたりのものにしたくないじゃん？」

秋人「うーん、俺は、花さんちに飾ってほしいけどなあ」

花「そっかあ……」

20

カフェ・表

秋人「でも、花さんがそうしたいなら、そうしましょう？」

花「うん、ありがとう」

秋人「あ、でも、うち花瓶とかないや」

花「じゃあ、今から買いに行こっか」

花は意味ありげに花束を眺めていて。

店から出てきたふたり。

花は抱えている花束を見つめている。

秋人「あっちの方、雑貨屋ありましたよね、花瓶探してみます」

「？」

花「うん」

手を繋いで、歩き出す。

片手で持った花束は、足にぶつかったり、扱いが粗雑になる。

21

秋人の部屋・夜

ブーケになっていた花が花瓶に活けられている。

ふたりの吐息が部屋に響いている。

秋人「花さん。好きです。大好きです」

花は秋人の髪の毛をそつと撫でる。

秋人「花さん」

花「ん……秋ちゃん……」

秋人「ずっと一緒」

花「……うん」

秋人「ずっと、一緒、です」

二人の行為は続いて。

22

秋人の部屋・深夜

下着姿で寝ているふたり。

花はふつと起きて、ベッドを出ようとする。

23

が、秋人も起きて、抱きしめられて戻されてしまう。

花 「……」

秋人 「どこにも行かないで」

軽くキスを落として、抱きしめる。

会社・オフィス

デスクワークしている花、秋人。

経理の女性が花に声をかける。

経理 「石田さん、今お時間いいかしら？」

花 「はい！どうされました？」

経理 「坂井さんの精算のことで、これなんだけど」

花 「んー、この間の会食の領収書ですね」

経理 「詳しい情報が書かれてなくなってる」

花 「あー、私も同席していたのでわかります！お借りしても

いいですか？」

経理 「ありがとう」

花 「すみません、坂井さんこういうこと多いですよ？いつもご迷惑おかけしてます」

経 理 「(笑って) いいのよ、石田さんがいつもフォローしてくれてるし」

花 「坂井さん、こういうの苦手なんですよ」

経 理 「ふふふ、仲良しねえ」

花 「えー？そうですか？」

経 理 「(こそっと) 付き合ってるの？」

花 「(思わず声が大きくなって) えっ？坂井さんと？」

経 理 「え？違うの？みんなずっとそう思ってたわよー」

秋人、その会話が引つかかって、手が止まる。

花 「(笑って) いい加減結婚してほしいんです」

経 理 「あら、私たちはお似合いだなってずっと思ってたのに」

花 「尊敬してる、先輩です」

経 理 「そう？残念？」

作業が終わって、経理さんはさーっといなくなる。

秋人の方を見れない花。

スマホ越しに秋人の話し声が響いている。

秋人の声「でね？そのとき、猫がぴゅーって飛び出してきて、俺

すげーびっくりして！」

適当に相槌を打っている花。

置かれた灰皿に火のついた1本のたばこ。坂井と同

じ銘柄。

秋人「花さん？聞ってる？」

花「聞ってるよ。でも眠くなってきた」

秋人「……もう、寝よっか」

花「ごめんね」

秋人「おやすみ花さん。また明日」

花「おやすみ」

電話が切れる。

花は灰皿のたばこをいじっていて。

25

オフィス街

煙をただと見つめている。

外回り中の花、秋人、坂井。

坂井「ちよつと早いから、休憩しようか」

花「坂井さん煙草行かれます？」

坂井「うん。飲み物でも買って休憩しといて。俺コーヒー」

坂井は財布から千円取り出して花に渡して、去って  
いく。

花と秋人は近くの自販機へ。

花「秋ちゃんは？」

秋人「え？なににしようかな？」

花はお金を入れていて、秋人は飲み物を眺めている。

秋人「あ、坂井さん、コーヒーってブラックですかね？」

花「ん？坂井さんは微糖」

花は自販機から2本の微糖の缶コーヒーを取り出す。

秋人はそれを見つめていて。

秋人「……夫婦みたいっすね」

花「……長いだけだよ」

秋人「……そうですか？」

花「私は、秋ちゃんと付き合ってるじゃん」

秋人「……でも周りの人は」

花「(遮って)ていうか、秋ちゃん、先輩の好きなもの把握

してなきやだめ！」

秋人「……花さんも微糖派なんですか？」

花「私も、坂井さんも、微糖派です」

秋人「でも花さん、カフェ行くと甘い頼むじゃん」

喫煙所から坂井が戻って来るのが見える。

花、空気を誤魔化すように、坂井に手を振って。

花「坂井さん、微糖？」

坂井「お、さすがです。ありがとうございます」

花「いつものです」

坂井「わかってるね？」

26

夜道

秋人「……」

秋人、無言で睨んでいる。

坂井「ん？」

花「佐藤くん？」

秋人「……なんか、ふたり、近いっすよね」

花「そんなこと、ないから」

坂井「え、セクハラってこと？」

秋人「人によっては、そう見えるんじゃないですか？」

坂井「まじ？ 厳しくない？」

花「坂井さん気をつけないと」

坂井は笑っていて。花は無理に愛想笑いしている。

恋人繋ぎで歩くふたり。会話はない。

早足の秋人に、花は頑張ってペースを合わせている。

入ってくる花、秋人。

秋人は強引に花を玄関のドアに押し付ける。  
何度もキスして、花の服を脱がしていく。

花 「……………秋ちゃんっ……………玄関……………待って……………」

花の吐息混じりの抵抗も、秋人には届かず。

秋人 「花さん……………花さん……………好き……………」

そのまま秋人は強引に行為を続ける。

部屋にはあの時の花が飾られたまま。

花、秋人ともみくちやになりながらベッドに雪崩れ  
込む。

秋人 「花さん……………」

行為を続けながら、名前を呼び続ける秋人。

花はただ、吐息を漏らしている。

秋人 「花さん、全部ほしい」

花はただ、秋人に委ねる。

28

会社・喫煙所

早朝の喫煙所。

花が一人いる。吸わないたばこに火を点けて、見つめている。

29

会社・オフィス

電話している秋人。

秋人「はい、はい……申し訳ございません……はい……すぐ確認いたします……申し訳ございません……はい、失礼いたします……」

電話を切ると、泣きそうな表情で花を見る。

秋人「花さん、\*\*（社名）さんからお電話で……」

花「どうした？」

秋人「なんか……」

花 「ゆっくりで大丈夫」

秋人 「なんか、すごい怒ってて……」

花 「うん、大丈夫。わかった、私から確認するね」

花、電話を手に取って。

花 「佐藤くんは、過去のメール確認しておいてね。落ち着い

てからで大丈夫」

電話をかけて、取引先とやり取りを始める。

秋人は震えていて。

オフィス街

ビルから出てくる花と坂井。

花 「坂井さん、ご同行いただいてすみませんでした」

坂井 「ううん、大したことなくてよかったよ」

花 「申し訳ございません」

坂井 「花が悪いわけじゃないじゃん」

花 「私の監督不行き届きです」

31

坂井「それ言ったら俺の監督不行き届きです」

花「……」

坂井「今日飯行こうか」

花「……はい」

会社・オフィス

帰社してくる花と坂井。

坂井「俺部長に報告しとくわ」

花「はい、ありがとうございます」

坂井「んじゃ、夜ね」

花「はい……」

デスクワークしている秋人が目に入って。

花「佐藤くん」

秋人「はいっ……」

ビクッと反応する秋人。

花「坂井さんに、ちゃんとお礼して？」

秋人「……ありがとうございます。僕のせいで、すみませんでした」

坂井「(笑って) 花さん厳しいよー。気をつけてねー」  
その場を去っていく坂井。

飲んでいる坂井と花。花はかなり酔っ払っていて。

花「坂井さん、いつもそう!」

坂井「そんな怒らないでって」

花「いつも大丈夫って、しょうがないって言う」

坂井「しょうがないでしょ」

花「しょうがないくない」

坂井「ミスもトラブルも起こるもんでしょ?」

花「……私、全然だめだ」

涙が溢れてくる花。

花「坂井さんみたいになりたいのに」

坂井「十分優秀ですよ」

花「いつつも坂井さんばかり前にいる」

坂井「……」

花「私は、坂井さんの、隣にいたいのに」

坂井「……いつもいてくれてるじゃない」

坂井は手元のビールを飲み干して。

花を見つめて、笑顔で。

花もグラスを煽る。悔しい。

居酒屋・表

店から出てくるふたり。

坂井「一人で帰れる？」

花「帰れます」

坂井「そっか。駅まで歩く？」

花「坂井さんタクシーですよ？気にせず乗ってください」

坂井「いや、歩こうよ」

34

駅前・夜

二人、駅に向かって歩き始める。

花 「……」

しばらく沈黙で。

坂井 「……佐藤くんとさ」

花 「？」

坂井 「佐藤くんと、付き合ってるの？」

花 「……どうしてですか？」

坂井 「仲良いなって、思ってる」

花 「……入社から、お世話にしているの」

坂井 「付き合いばいいじゃん」

花 「そういうんじゃないです」

坂井 「お似合いだけど」

花 「……坂井さんには、関係ないです」

坂井 「……そっか」

## 秋人の部屋・夜

一人泣いている花。手にはたばこ。

火を点けて、煙を吸い込む。が、咳き込む。

それでも何度か吸おうと続ける。が、何度も咳き込む。

ポケットからスマホを出して、秋人に電話をかける。

寝ぼけた様子で秋人が出る。

花 「……秋ちゃん、会いたい」

秋人が鍵を開けると、花が雪崩れ込んでくる。

秋人はそれを抱き止めて。

秋人 「花さん、酔っ払ってる」

花も抱きしめ返す。

花 「秋ちゃんー？」

秋人 「うん？」

花 「秋ちゃん……」

36

秋人の部屋・朝

秋人「ごめん、俺のせい？」

花「違う……なんか……なんかあ、もう、疲れた……」

秋人「うん、よしよし」

二人、強く抱きしめ合う。

秋人「……花さん、たばこ吸った？」

花「秋ちゃんー？」

秋人「……うん」

花「秋ちゃん、私、疲れちゃった」

秋人「大丈夫だよ」

花「好き」

秋人「……俺も好きだよ」

花「……秋ちゃん」

秋人「……花さんはずるいなあ」

秋人はずっと花の背中をさすっている。

37	<p>道</p> <p>明るい陽の光が差し込む部屋。 花は花瓶の水を換えている。 飾られた花束はすでに枯れかけている。</p>
38	<p>会社・喫煙所</p> <p>たばこをふかしている坂井。 花が入ってくる。</p> <p>花 「坂井さん、昨日はありがとうございました」 坂井 「いいって。その後どう？」 花 「まあ、しばらくは私が窓口ってことで、先方も了承してくれています」</p>

会社・オフィス

坂井「まあ、丸く収まってよかったよ」

花「坂井さんのおかげです」

坂井「そんなことないよ。花さんが優秀で助かります」

花「またそれ」

坂井「……ていうか、朝、見たよ」

花「はい？」

坂井「佐藤さんと付き合ってたんじゃない」

花「(笑って)坂井さんには、関係ありませんから」

二人で笑っている。

喫煙所から戻ってきた花と坂井。

秋人「花さん！」

花「どうした？」

秋人「先日の件、お詫びとお礼です！」

秋人は花に花束を渡す。

41	<p>秋人の部屋・早朝</p> <p>カーテンのほんの小さい隙間から、まだ青い朝日が覗いている。</p>	40	<p>駅</p> <p>周囲は少しざわつく。坂井もびっくりしていて。</p> <p>花 「花束で？」</p> <p>秋人 「花束が、一番、気持ちが伝わるかなって」</p> <p>花 「せっかくだし、デスクに飾ろうかな」</p> <p>秋人は笑顔で、でも坂井をチラ見して。</p> <p>花は笑顔で。</p>
	<p>花、駅の大きなゴミ箱に、持っていたたばこを捨てる。</p> <p>すぐに去っていくが、振り返る。</p>		

花は、朝の支度を終えて、バスルームから出てくる。  
鍵を手にとった音で、ベッドで寝ていた秋人が起きる。

秋人「(眠そうに)花さん」

花「おはよ」

秋人「一回帰るの？」

花「うん、またあとで」

秋人は花を抱きしめる。

秋人「行かないで」

花「うん？」

秋人「置いて行かないでよ」

花「……置いて行かないよ」

秋人「好きです」

花「……」

花は秋人にキスする。

そのまま秋人から逃れて、玄関へ。

秋人は追いかけてきて、玄関ドアに壁ドンしてキス

する。

秋人「花さんは、ずるい」

花「ずるくても、好きでしょ」

花からもキスして、部屋を出ていく。

部屋には、枯れかけの花が花瓶に飾られている。

了